

【海外論文紹介・文献研究】

『雪竇録』 宋元刊本旧状新探

—東アジア各地に所蔵される

希少古版本を中心に—*

商 海鋒**著・廣瀬 直記***訳

概要

重顕の『雪竇録』は、北宋前期の宗門語録のさきがけ的存在である。当初は七集八巻という構成で、写本として伝えられた。北宋神宗（在位1067-1085）のときに入蔵（大藏經に収めること）を請願する奏上があったが、かなえられなかった。初刻本が作られたのは徽宗の大観二年（1108）以前であり、南宋寧宗の開禧元年（1205）に再刻された。再刻本は、雪竇徳雲の指導のもとで、寧波の刻工洪挙が彫ったものであり、中国国家図書館所蔵「雪竇四集」がその天下の孤本である。この語録は、理宗の淳祐元年（1241）に日本に渡り、鎌倉時代の正応二年（1289）に三刻本が上梓された。それは東山湛照が中心になって、開禧本を底本に復刻したもので、五山版の初期代表作である。日本の東洋文庫所蔵本がその唯一の完本であり、それによって散佚した宋僧徳雲の「序」を補うことができる。また、元の泰定元年（1324）には、寧波の刻工徐汝舟によって四刻本が彫られた。東京の石川武美記念図書館、ミュンヘンのバイエルン州立図書館、台北の「国家図書館」に零本があり、それらによって散佚した元僧如芝の

*「『雪竇録』 宋元本旧貌新探：以东亚所藏该录稀见古版为中心」（『文献』2015年第3期（总第149期）、2015年5月13日出版）所載。

**香港教育大学文学及文化学系助理教授・花園大学国際禅学研究所客員研究員

***専修大学経済学部非常勤講師

「序」と自如の「疏」を補うことができる。「雪竇七集」は南宋中期からは「語録」、「偈頌」、「詩歌」という体裁によって三冊に分けられ、再刻本、三刻本、四刻本は、いずれも由来を同じくする十一行本である。明初の建文帝のときにはじめて入蔵されたが、その後「頌古」の部分が省略され、明末『嘉興藏』本に至っては、もはや宋元の旧状を留めていない。

キーワード：雪竇七集 宋本 元本 五山版 東アジア文献交流

一、序論

雪竇重顕（980-1052）の『雪竇明覚禪師語録』（略称『雪竇録』）は、北宋前期の宗門語録のさきがけであり、その宋元刊本の旧状、および古代東アジアにおける伝播については整理しておくべき重要な点がたくさんある¹。

第一に、現行の『大正藏』所収『明覚禪師語録』²は、『嘉興藏』所収の崇禎七年（1634）刊本を底本とし、本来の七集八巻ではなく、六集六巻を残すのみである。また、文字の転訛、脱落があるのみならず、構成にも乱れがあり、胡文楷（1901-1988）がつとに「宋刊本の旧状ではない」³と指摘した通りである。実際のところ、この語録は明初の『建文南藏』⁴からすでに六集であり、宋元刊本とは別物になっていたのである。

第二に、この語録の伝世本はもともと極めて少ないのだが、宋元の旧本であれ、日本の鎌倉、南北朝時代の復刻本であれ、あるいは宋元の人々や五山の僧侶たちの記録でも、明代以前のものは、すべてそれが七集八巻本の「雪竇七集」だったことを物語っている。しかし、瞿鏞（1794-1846）および最近の『中華再造善本』の提要では、「雪竇四集」がその完本だと誤解している⁵。

第三に、この語録は雪竇禪師の生前に成った後、長い間、わずかに写本として単行するのみであり、明初にはじめて入蔵された。ただ、従来ほと

んど知られていなかったことだが、北宋神宗のときにも入蔵が試みられている。しかし、それは果たされず、その後、北宋徽宗のときに版刻されたものが、すでに散佚した初刻本『雪竇録』である。以上のことは、いずれも希少な海外所蔵文献を利用しなければ、明らかにできなかったことである。

第四に、中国国家図書館所蔵の「雪竇四集」零本は、この語録の現存する最も古い版本であり、その影印本が民国期の『四部叢刊統編』と最近の『中華再造善本』唐宋編に収められている。それについては、古くは瞿鏞が、「廓」字が諱避されていることにもとづいて「寧宗（在位 1194-1224）後の版本である」と考えたが、これまでその確かな素性、すなわち南宋の開禧元年（1205）本であることは明らかにされていなかった。

第五に、日本の鎌倉時代には、『雪竇録』が五山版の一つとして復刻された⁶。東洋文庫所蔵の正応二年（1289）版は、南宋開禧本を底本としたもので、五山版禅籍の初期代表作であると同時に、この語録の世界唯一の完本である。日本の学界では早くからその影印本が利用されていたが⁷、中国ではまだその重要性がよく知られていない。

第六に、『雪竇録』にはもう一つの希少版本、元の泰定元年（1324）版があるが、従来ほとんど注目されることがなかった。東京の石川武美記念図書館とミュンヘンのバイエルン州立図書館、台北の「国家図書館」に零本がある。台北の所蔵者にはとくに注意してほしいのだが、清末中国、日本、台湾を問わず、それはこれまで「宋刊本」と誤解されていたが、じつは清末に日本から大陸に帰還し、その後、戦火に遭って台湾に流れ着いたものである。これは近代東アジアの書籍流通に関する一つの好例だといえる。

本稿では、以上の諸点をめぐって、東アジアの三地域（中国大陆、台湾地区、日本）に所蔵される希少古版本（宋版、五山版、元版）を総合的に利用し、『雪竇録』宋元刊本の旧状、およびその東アジアにおける古今の流通経緯に関するよりはっきりとした輪郭を描いてみたい。

二、『雪寶録』の北宋写本および初刻本

『雪寶録』の各集の名称、順序および編者をはっきり記す最も古いテキストは、北宋の呂夏卿（1018-1070）「明州雪寶山資聖寺第六祖明覺大師塔銘」である。この銘文は、雪寶禪師が亡くなって間もない北宋英宗の治平二年（1065）に撰述された。そこに以下のようにある。

自師出世、門人惟益、文軫、圓應、文政、遠塵、允誠、子環相與哀記提唱、語句、詩頌、爲洞庭語録、雪寶開堂録、瀑泉集、祖英集、頌古集、拈古集、雪寶後録、凡七集……治平二年乙巳歲二月五日。⁸

ここから、北宋の『雪寶録』が全七集から成っていたことがわかる。また、呂氏の「塔銘」にならって、それを「雪寶七集」と呼ぶことができよう。

『雪寶録』は重頤が円寂する前に成立していたが⁹、その後数十年間は写本として伝えられるのみだった。神宗の元豐三年（1080）に『崇寧藏』が作りはじめられ、その際に『雪寶録』の入蔵が試みられたが、失敗に終わった。これは従来ほとんど知られていなかったことである。

『崇寧藏』は『開寶藏』と『契丹藏』に次ぐ、第三の漢文大蔵經であり、史上初の私刻大蔵經と言われているが、その内容選択には王朝の意向が反映されている。北宋太宗朝の『開寶藏』がインドの翻譯經典のみを収めた¹⁰のとは違って、『崇寧藏』には当時の禪林の著作がはじめて加えられた。すなわち、真宗景德年間（1004-1007）の道原（生没年未詳）『景德伝灯録』¹¹、仁宗嘉祐七年（1062）の契嵩（1007-1072）『伝法正宗記』、『輔教編』、および南宋の孝宗乾道七年（1171）の宗杲『大慧普覺禪師語録』¹²であり、これらは勅命を受けて収められた。

『大慧録』が入蔵されたのは、宗杲の弟子雪峰蘊聞（生没年未詳）が奏上請願したからであるが、それと同じように、雪寶重頤の再伝の弟子円照宗本（1021-1100）も神宗（在位 1067-1085）のときに『雪寶録』入蔵の請

願を行なった。しかし、それは聞き届けられず、しかもそのこと自体、中国では長らく忘れ去られていた。一方、十八世紀江戸時代の日僧大智実統の記述には次のようにある。

大宋趙太祖之後、第六主曰神宗……圓照本公請以雪寶錄入藏、時中書省諸大臣……不許入大藏。¹³

その後、それがはじめて入蔵されたのは明初建文元年（1339）の『初刻南蔵』¹⁴のときである。

このように、『雪寶錄』は神宗朝では入蔵資格を得られなかったが、徽宗朝の大観二年（1108）以前に零本私刻というかたちではじめて版刻され、以後、版本として伝わるようになった。そのことは以下の事情からわかる。

北宋後期に成った陸庵善卿（生没年未詳）『祖庭事苑』は、古典時代の禪林初学者に広く利用された禪宗注疏の一つであるが、その記述の最大部分を占めるのは『雪寶錄』に対する訓解である¹⁵。『祖庭事苑』は北宋徽宗の大観二年（1108）に初刻され、南宋高宗の紹興二十四年（1154）に再刻されたが、いずれも散佚している。現存最古の版本は、日本の南北朝時代（1331-1392）に京都の南禅寺が南宋紹興版を復刻したもので、東京の三井文庫にその初印本が所蔵されている¹⁶。そのなかに、『雪寶錄』が北宋に初刻されたことを示す最重要証拠となる数条の校記がある（表1）。

表 1

	『雪寶錄』 ¹⁷ 子集／葉	原文	『祖庭事苑』 ¹⁸ 卷／葉	校記
1	洞庭／八	道遠乎哉	一／三十八	触事而真、意旨如何 第七板第四行上脱八字
2	拈古／十九	示衆云	二／二十六	俱抵和上 第十六板十二行中脱四字
3	祖英上／三	輕触	三／十八	不輕触 第三板第一行脱三字
4	祖英上／三	孤	三／十九	運孤明 第三板十三行脱運字

この表のうち、とくに注意すべきは、第二、四条の校記であり、それぞれ「十二行」と「十三行」という言い方が見える。これらは陸庵が見た版本が每半葉十三行以上だったことを示している。それに対し、現存する『雪竇録』南宋版、五山版、元版は、例外なく每半葉十一行である。ここから、『祖庭事苑』が『雪竇録』訓解の際に底本としたのは、現存の版本とはまったく異なる北宋の大観版であり、そしてそれがすでに散佚した『雪竇録』の初刻本であると推測される¹⁹。

なお、『雪竇録』の巻数について記す最古の文献は、南宋初に成った晁公武（1105-1180）『郡齋讀書志』であり、「雪竇頌古八卷。右皇朝僧道顯撰、居雪竇山」²⁰と見える。晁公武は雪竇諸集を「頌古」という名でくくっているが、誤りである。しかし、八巻という数は『雪竇録』全体の総巻数を正しく示している。

三、『雪竇録』の南宋再刻本および五山三刻本

『雪竇録』が再刻されたのは、初刻の約百年後、南宋寧宗の開禧元年（1205）である。いま中国国家図書館に所蔵されている「雪竇四集」の零本が、まさにその現存する天下の孤本である²¹。この版本は、左右双辺、每半葉十一行、每行二十字で、「廓」字が欠筆になっており、寧宗趙昀の諱が避けられている。中国の学界では、清代から今日に至るまで、それが宋本であることは知られていたが、版刻された具体的な年代、場所およびその歴史的意義については早急な解明が待たれている。

この版本には、「頌古」、「拈古」、「瀑泉」、「祖英」の四集が含まれ、題簽には「宋板雪竇語録、泰興季氏祕籍、芥瓶室藏」とある。「頌古」の巻首には、「季振宜藏書」という朱文長方形の印、「臣壻」という朱文正方形の印、「鉄琴銅劍樓」という白抜き長方形の印が捺されている。これらの印記から、その所蔵者が季振宜（1630-1674）、劉壻（1719-1804）、瞿鏞（1794-1846）と次第したことがわかる。また、「祖英」の巻末には「四明

洪舉刊」という刊記がある。民国期には、その影印本が涵芬樓『四部叢刊統編』²²に収められ、いまは『中華再造善本』唐宋編²³にも入っている。

ところで、椎名宏雄氏が指摘しているように、この四集本の構成からは、ある重要な事柄がうかがわれる。すなわち、「雪竇七集」のうち、四集本に含まれているものは偈頌と詩歌に、それ以外の三集「洞庭」、「開堂」、「後録」は、いずれも語録に偏っていることである²⁴。筆者が推測するに、南宋の「雪竇七集」は形式の違いから、一に語録、二に偈頌、三に詩歌の三冊に分けられていたはずである。というのは、第一に、仏典の構成方法の角度から見ると、一に語録、二に偈頌、三に詩歌という形式は、まず長行があってそれから韻文がある、という仏典の伝統的構成に一致するからである。第二に、宋代詩文集の構成方法の歴史的変遷から見ると、北宋では「編年法」が尊ばれたが、南宋中期からは「分類法」が一般的になったからである。第三に、開禧版とその復刻本である五山版によって、宋本「雪竇七集」の版数を数えてみると、語録類が59片、偈頌類が52片、詩歌類が68片あり、その通りに装幀すれば、だいたい三冊になるからである。第四に、鎌倉時代の日僧の目録によると、当時、日本に渡った仏書に『明覚語』があり、まさに「一部三冊」とされているからである²⁵。第五に、これは最も確かなことだが、開禧版の刊記「四明洪舉刊」も、元の泰定版の刊記「四明徐汝舟刊」も、いずれも「祖英集」の末尾にあることから、宋元版「雪竇七集」の最終巻は、間違いなく（三の詩歌に分類される）「祖英」だったといえるからである。

さて、もし国家図書館所蔵の開禧版「雪竇四集」の素性、すなわちそれが版刻された年代、場所および歴史的な位置づけを確かめたいならば、日本の五山版との親子関係に目を向けぬわけにはいかないだろう。とくに注意を払うべきは、五山版には開禧本から失われた序文が残っていることである。

まずは、五山版の成立経緯から見てみたい。日僧の円爾弁円（1202-1280）は南宋理宗の端平二年、鎌倉時代の嘉禎元年（1235）に入宋し、六

年後の理宗淳祐元年、鎌倉仁治二年（1241）に大量の図書を携えて帰国した。これは十三世紀の中国の書籍、知識および思想が最大規模で日本に伝わった出来事であり、その後の鎌倉室町時代の宗教、文化および制度に大きな影響を与えた。円爾は五山東福寺の開山祖師である。このとき日本に伝わった書籍の多くは、「普門院經論章疏語録儒書等目録」に記録されている。この目録は、円爾の三伝の弟子大道一以（1292-1370）が約百年後の1353年に編纂したもので、必ずしも円爾が舶来した書籍だけを列挙しているわけではないが²⁶、「収」字部の『雪竇明覚語』一部二冊、『明覚語』一部三冊、および「光」字部の『祖英集』一部一冊は、円爾によってもたらされたと見て間違いない。というのは、東洋文庫所蔵の五山版『雪竇録』『刊語』に、次のように述べられているからである。

明覺大師語録、雖傳來年久、曾無人開板、今命工鏤梓、欲流通將來。伏願皇鳳永扇、祖道重興矣。時正應二年仲春下旬。三聖住持比丘湛照謹記。²⁷

これによると、この版本は鎌倉時代の正應二年（1289）に東山湛照（1231-1291）のもとで版刻されたという。彼は円爾の直弟子であり、師の跡を継いで東福寺の二代目となった。彼が晩年に三聖寺に隠居していた際に、『明大師語録』を上梓することができたのは、ほかでもなく師のもたらした『明覚悟』を受け継いでいたからである。実際、開禧版と正應版を比較してみると、内容、刻風、版式のいずれを取っても、両者が「復刻」関係にあることが確かめられる。

この鎌倉時代の正應版『雪竇録』は、東洋文庫のほか、石川武美記念図書館と国立公文書館にも所蔵されているが、記念図書館本には「洞庭」、「開堂」、「後録」、「瀑泉」しかなく、公文書館本には「祖英」が残っているに過ぎない。東洋文庫本のみが完本であり、それだけに貴重である。

また、東洋文庫本は、有り難いことに、現存するものでは唯一、南宋開禧版の原序をそのままのかたち（行草書体で版刻）で残してくれている。以下のようなものである。

明覺禪師住当山三十餘年、雷霆諸方。時天衣方主中莊、由是冲、本、秀、夫出、而盛其道於天下。前此蓋未聞有刊其語於山中者、及是乃克爲之、視錢塘、福唐板本爲優。具透關眼者閱之、可以挹清標於百載、啓蟄戸於玄關、乃知正法眼藏、付囑有在。時開禧元年仲冬、雪竇住山德雲謹題。

この序が貴重なのは、『全宋文』にさえ未収ということもあるが、それ以上にこれが国家図書館所蔵の宋本『雪竇録』の刊行年代、場所、およびその歴史的意義を明らかにする重要な手がかりになるからである。序の撰者、南宋の雪竇德雲禪師は史書に記録がないが²⁸、序文によれば、寧宗の開禧元年（1205）に雪竇山資聖寺の住持になったようである。序に「刊其語於山中」と言っているのが資聖寺のことであり、開禧本の刊記「四明洪舉刊」とも符合している。つまり、これによって、開禧本の刊行場所が四明（現在の浙江省寧波市）の雪竇山資聖寺であり、一般に南宋の版刻の中心地だったとされる錢塘（現在の浙江省杭州市）や福唐（現在の福建省福州市）ではなかったことがわかる。

以上により、『雪竇録』が開禧元年に資聖寺で刊行されたことが明らかになったのだが、従来そのことが東アジアの文化史上、どのような歴史的意義をもつかは、まったく問題にされることがなかった。なぜなら、中国ではこの序の存在がほとんど知られていなかったからであり、日本では「冲、本、秀、夫出、而盛其道於天下」と「前此蓋未聞有刊其語於山中者、及是乃克爲之、視錢塘、福唐板本爲優」という重要な二句が誤読されていたからである²⁹。

この二句のうち、前者によると、それがじつは神宗朝の円照宗本による『雪竇録』入蔵の試みを受け継ぐものだったことがうかがわれる。というのは、「冲、本、秀、夫」の「本」は円照宗本のことだからであり、これは第二節の中ほどに挙げた江戸時代の日僧大智実統の記述ともうまく噛み合う。また、後者によると、寧宗の開禧元年本が北宋以降における『雪竇録』の二度目の版刻だったことが確かめられる。

禅院の五山十刹制度が遅くとも寧宗の嘉定年間（1208-1224）以前に確立されていたことに鑑みれば、当時の雪竇山資聖寺は「十刹」の一つだったことになるが³⁰、そこで刊行された禅籍は、日本で五山版が作られはじめたきっかけとしても模範的な作用を及ぼしたはずである。五山版は東アジアにおける典籍出版事業の一つの重要な局面かつ範疇であり、狭義のそれは鎌倉時代正応元年（1288）の東福寺にはじまる。その先鞭を付けたのは東山湛照禅師である。その年から翌年の春にかけての半年間に、東山の指導のもとで『応庵』、『密庵』、『虎丘』、『破庵』、『雪竇』の五録が刊行された³¹。彼が以上のものを選んで復刻した動機について考えてみると、そこに「虎丘紹隆（1077-1136）、応庵曇華（1103-1163）、密庵咸傑（1118-1186）、破庵祖先（1136-1211）」という明らかな法脈、およびその直後に続く「無准師範（1178-1249）、円爾円弁、東山湛照」というもう一つの隠れた法脈が浮かび上がってくる。つまり、東山は前の四つの語録を復刻することによって、みずからが南宋以来の臨済宗の正統な法脈を受け継いでいることを顕示しようと躍起になっていたようである。一方、五つ目の語録、すなわち『雪竇録』の復刻からは、そのような個人の思わくを超えて、はるか北宋の雲門宗にまで連なろうとしたように見える。

以上のように、『雪竇録』の宋版および五山版の刊行という二つの事柄は、東アジアの書籍史のみならず、東アジアの禅宗史の文脈に置いてみなければ、その関連性および歴史的意義を限なく明らかにすることはできないのである。

四、『雪竇録』の元代四刻本

ここまで『雪竇録』の初刻、再刻（開禧版）、三刻（五山版）について論じてきたが、つづいてはその四刻本³²、すなわち元の泰定元年（1324）版の詳細、およびその東アジアにおける伝播について検討してゆきたい。この版本に関しては、完本が現存しておらず、各地に若干の零本が残され

ているのみである。そのうち、石川武美記念図書館には「開堂」、「後録」、「拈古」、「頌古」があり、バイエルン州立図書館と台北の「国家図書館」には「祖英」がある。この版本の冒頭には南宋徳雲の「序」と元僧如芝の「序」が、末尾には「雪竇行状」が付され、それぞれ重要な事柄が記されている。また、台北の「国家図書館」所蔵本はこれまで「宋刻」と誤解されていたが、以上のことについては詳細に分析してみる必要がある。

まず、石川武美記念図書館（旧成實堂文庫）は、元版『雪竇録』を乾坤二冊に分けて所蔵しており、それぞれの末尾には「天文十一年壬寅三月初四、於善惠軒下一覽之次、叨加朱句耳。瓢山人五十三齡」、「天文十一稔壬寅暮春初六、於善惠室内披覽之次、信筆朱句矣。瓢山人五十三齡」³³という署名がある。瓢山人こと彭叔守仙（1490-1555）は、もと京都東福寺の住持であり、晩年に善惠軒（善恵軒）に隠居し、天文十一年（1542）に『雪竇録』に批評を加えた。徳富蘇峰（1863-1957）の跋文には、「是書實是泰定元年、我正中元年刊也。藏書印一曰善惠軒、是京都東福寺塔頭也。一曰彦梁、未詳爲何人。一曰彦洞、彦洞字明叟、蘭州芳禪師之嗣法、京都建仁寺僧也、晩年不知其所終處。一曰椳齋、即狩谷望之也」³⁴とある。これによると、この書ははじめ五山の諸大寺に収められていたが、やがて江戸の著名な漢学者狩谷椳斎（1775-1835）のもとに流れ着き、その後、明治時代の漢学者徳富蘇峰の手に渡ったようである。

次に、ドイツミュンヘンのバイエルン州立図書館所蔵の元版「祖英」³⁵は、日中の学界では従来知られていなかったものである。この書にも朱筆の批評があり、外箱には「佛頂國土手澤」、「元槧」という墨題がある。仏頂国土は江戸初期の臨済僧一糸文守（1608-1646）のこと。巻首には「一糸」という白抜き楕円形の印と「小汀氏藏書」という朱文長方形の印が、巻末には「小汀文庫」という朱文長方形の印と「月明莊」という朱文長方形の印が捺されている。以上のことから、この書は江戸時代には寺院に収められていたが、近年になって経済評論家の小汀利得（1889-1972）の手に渡ったことがわかる。

次に、台北「国家図書館」所蔵の「祖英」は、最も複雑な問題を抱えており、しかもとりわけ重要なので詳細に検討したい。これはミュンヘンのものよりもわずかに欠損が目立つが³⁶、じつはそれと同じ版本である。行間には室町僧による朱筆の書き込みがある。眉上には墨筆の校記があり³⁷、以下に収録した（表2）。

表2

	詩題	巻／葉	詩句	校記
1	春風辞寄武威石秘校	上／十一	難（御）同孤劣	禦
2	送清禪者	上／二十	落落風規（今）古情	合
3	漁父	下／九	千尺糸（輪）在方寸	綸
4	送新茶（二首其二）	下／十二	龍麝相資笑解（醒）	醒
5	又和范監簿	下／十五	島月（思）雲侵	忽

この五つの詩句の文字は、元の泰定本でも、宋の開禧本でも、まったく同じである。したがって、校記の内容は、佚名の日僧が異本を見て対校した結果ではなく、漢詩の教養にもとづいて正したのだと考えられる。

また、この書の巻首には「**遼園**収蔵」という朱文長方形の印と「澄懷堂珍藏記」という朱文正方形の印、「国立中央圖書館収蔵」という朱文長方形の印が、巻末には「山陰錢氏藏書」という朱文長方形の印が捺されている。澄懷堂とは、かつて内閣農林大臣を務めたこともある山本悌二郎（1870-1937）の堂号。彼は中国古書絵画に関する近代日本随一のコレクターだが³⁸、その古書コレクションについては、これまで注目されることがなかった。山陰錢氏とは、錢德培（1843-1904）のこと。彼は清末の在ドイツ大使館第一期メンバーであり、その後、在日本大使館の参事官（1887-1890）を務めた。黎庶昌（1837-1896）が二度目に駐日公使を務めた際のメンバーである。**遼園**とは、張鈞衡（1872-1927）の子張之熊（1890-1945）の号。張氏父子は、清末民国期の最も重要な蔵書一家である。張鈞衡『適園藏書志』に「祖英集二卷、宋刻本」³⁹と記されており、それがこの書である。張之熊は父の適園蔵書の大半を受け継いだ、彼の『遼

圓善本書目』もそれを「宋刊本」⁴⁰としている。

張氏の蔵書は、1941年に中央図書館文献保存同志会によって買収され、後に台北「国家図書館」最大の旧家蔵書コレクションとなったが⁴¹、屈万里（1907-1979）の『国立中央図書館善本書目』や『国家図書館善本書志初稿』もそれを「宋釋自如集贊刊本」⁴²としている。さらに、阿部隆一も台北でそれを実見したうえで「南宋」のものとは見なした⁴³。いまの台北「国家図書館」の公式ウェブサイトにも、やはり「宋諱玄殷缺筆……察其字形、雖大小不均、但結體方整、刀法尚圓潤、近宋浙本類型」⁴⁴とあり、「宋」のものとは判断している。

以上、この書の所蔵者の変遷について見た。すなわち、室町時代には寺院に収められていたが、やがて明治時代には山本悌二郎の手に渡り、清末には駐日使節の錢德培によって買い戻され、蔵書一家の張氏の手に渡り、その後、戦火を経て台湾に至った。これによって、東アジアの書籍流通の幅広い動きが見て取れるだろう。

同時に、この版本の由来が従来どう考えられていたかも確認したが、それは清代以降、鄭振鋒（1898-1958）を唯一の例外として⁴⁵、一貫して宋版と見なされていた。もちろん、それにはそれなりの理由があるが、宋諱の「玄、殷」は宋版の旧例にならったものに過ぎない。また、文字の形と彫りは、たしかに浙本（杭州を中心に刊行されたもの）に近く、端正で艶やかな欧楷（欧陽詢らの楷書体）であるが、元代中期の寧波の刻風も、依然南宋当時のものを残しており、時代の趨勢である流麗な趙体には変化していなかったとされる⁴⁶。さらに、新発見のドイツ本がそれと同一版本だったことも合わせて考えれば、台北本「祖英」がじつは元版であることは、ほとんど疑いの余地がないといえる。

以下においては、序文と付録の「行状」にもとづいて、元の泰定本『雪竇録』の詳細に関する卑見を開陳したい。まず、泰定本には二つの序文が付されている。一つは、宋僧徳雲の「序」で、その内容は第三節後半で見た正応版（東洋文庫本）のものと同じである。ただ、字体は行草書体から

楷書体に改められている。対校には役立つが⁴⁷、ここではとくに取上げない。もう一つは、以下に挙げる元僧如芝（1246-1329）の「序」で、これは『全元文』⁴⁸未収のたいへん貴重なものである。

明覺大師語録、版行久矣。然奥旨微言、峻機妙用、匪陋聞淺識者所可得而管窺蠡酌也。雪竇毀燹、版亦就燼、方外圓藏主募緣重刊。連城之壁、照乘之珠、復爲趙廷之歸、合浦之還、俾後學有所崇仰、其於吾教、豈少補哉。泰定甲子佛成道日、禾城本覺末學比丘如芝拜書。

撰者の如芝は、元の楊維禎（1296-1370）が記すところの「靈石芝禪師」⁴⁹のこと。また、『南屏淨慈寺志』には「靈石芝、泰定初住秀之本覺、行宣政院住淨慈、時年八十有四、海内尊仰、如古佛出興」⁵⁰とある。「禾城本覺」の「禾」と「秀之本覺」の「秀」は、いずれも嘉興（現在の浙江省嘉興市）のことを指す。つまり、如芝の「序」は、彼が泰定元年（1324）に嘉興の本覺寺に住持していた際に撰述されたものである。

次に、「行状」についてであるが、その内容は五つの部分に分けられる。第一に、「朝奉郎、尚書度支員外郎、直秘閣、兼充史館檢討、実録院檢討官、同知太常礼院、兼□事騎都尉、賜緋魚袋呂夏卿」が北宋英宗の治平二年（1065）に撰述した「明州雪竇山資聖寺第六祖明覺大師塔銘」。第二に、大慧宗杲（1089-1163）の「大慧和尚賛師画像」。第三に、「浙江万寿住山自如」の「重刊語録疏」。第四に、勸縁記「童行祖栄同募縁」と「雪竇住山守常勸縁」⁵¹。第五に、刊記「四明徐汝舟刊」。

「行状」に関しては、若干の重要な問題があるが、その多くはまだ解明されていない。まずは自如の「重刊語録疏」から見てみよう。

寺既毀、印版亦隨燼、人每病其磨滅而欲新之、今其時矣。凡我同志、痛先覺之洪規、闡千載之芳烈、其可後乎。右伏以乳峰峯嶺、目前萬象皆空。舌本瀾翻、瀑下千尋如故。天荒地老、山深水寒。廖廖浮幻何足云、落落宏規還可復。一時根極、芳生眼開。印蟾輪何必蹄涔、覲夜光須震滄海。巧出匠手、匪求蝕木於文。世有知音、不在焦桐之發。謹疏。⁵²

宋元時代、雪竇寺は南宋高宗の紹興二十七年（1157）と元世宗の至元二十五年（1288）の二度にわたって火災に見舞われた。撰者の自如は、元僧一溪自如（生没年未詳）のこと。彼の最初の伝記は『増集続伝灯録』に見え、そこに「杭州中天竺一溪自如禪師……初住浙江萬壽寺……天曆初、中天竺笑隱欣公奉召開山大龍翔寺、因舉代住中天竺者三人、御筆點師名」⁵³とある。「天曆初」はおそらく元文宗の天曆元年（1328）を指し、そのとき彼は杭州の中天竺寺に住持していた。とすれば、彼が「浙江万寿住山」として「重刊語録疏」を撰述したのは、それ以前のことだろう。浙江万寿とは、中国五山の第一に数えられる径山万寿禪寺のこと。この径山の住持が元代に新たに刊行された『雪竇録』の重刊「疏」を撰述したという事実は重要である。なお、この「疏」は『全元文』に収められていない。

以上のように、自如の活動時期から見れば、「疏」のいう「寺既毀、印版亦隨燼」は、南宋ではなく元の世祖至元二十五年のことである。この火災に関する最古の記録は、陳著（1214-1297）がその数年後に著した「重修雪竇寺記」であり、そこに「戊子夏四月夜、寺災、風烈不可撲滅、惟衆寮、涅槃堂存。師（善來）曰、變酷。非數可諉、祇自引咎、然棟宇無常、風景故在、壞者復興、吾責矣」⁵⁴と見える。自如が『雪竇録』を重刊したのは、この火災によって版木が失われたからである。

次に、「行状」巻末の「四明徐汝舟刊」という刊記について再考してみたい。この徐汝舟という寧波の刻工にいち早く注目したのは、日本の学者木宮泰彦（1887-1969）である。木宮は正応版『雪竇録』について検討した際に「徐汝舟」の名を見つけ、それは日本に渡った中国の刻工であるか、あるいは日本の刻工が本文と一しょに中国の刻工名をも復刻したか、ではないかと推測した⁵⁵。ついで、川瀬一馬（1906-1999）は木宮の第一の推測を支持し、この人物は宋末元初に日本に招かれ、仏書出版の手助けをした、という考えを示した⁵⁶。また、長澤規矩也（1902-1980）は26名に上る元代の徐姓刻工について整理したが⁵⁷、そこに「徐汝舟」の

名は見当たらなかった。そこで、中国の学者も大部分が進んで以上の説を踏襲し、宋元王朝と鎌倉幕府の文化交流を示す好例が兪良甫のほかにも存在したのだと考えていた。

ところが、阮元（1764-1849）が杭州で発見した「大慈山定慧禪寺碑」は、元英宗の至治三年（1323）に彫られたものだが、その末尾に「四明徐汝舟刻」という署名が見える⁵⁸。ほかに、元惠宗の至正五年（1345）に「浙江省儒学」のもとで刊行された『金史』の版心にも、「徐汝舟」の三字が刻み込まれている⁵⁹。さらに、ドイツと台湾に所蔵される『雪竇録』の刊記「四明徐汝舟刊」が版刻されたものであるのに対し、日本の五山版に付された「行状」は「四明徐汝舟刊」の六字を含め、すべて佚名の五山僧が毛筆で補写したものなのである。

以上のことから、日中版刻交流史上に興味深い話題を提供してきた「四明徐汝舟」は、じつは元代中後期の寧波の刻工だったことが明らかになった。彼は宋末元初の人物でもなければ、ましてや日本に行って出版に携わったこともないのである。「四明徐汝舟」という刻工が『雪竇録』を版刻したことは確かだが、それは元の泰定年間のことであり、南宋開禧本の「四明洪拳」とは120年もの隔たりがある。よって、五山版『雪竇録』の本文は宋本によって復刻されたものだが、「行状」の補写は元本にもとづくものなのである。

五、結論

『雪竇録』は北宋仁宗の宝元元年（1038）に成立した後、神宗朝（1067-1085）において入蔵が請願されたが、かなえられなかった。その後、しだいに影響力を増し、徽宗の大観二年（1108）以前に初刻本が作られた。南宋寧宗の開禧元年（1205）には、寧波雪竇山資聖寺の方丈雪竇徳雲の指導のもと、地元の刻工洪拳が再刻した。この版本は理宗の淳祐元年（1241）に日本に渡り、鎌倉時代の正応二年（1289）に東福寺二代目東山湛照のも

とで三刻本が作られた。資聖寺は元の世祖至元二十五年（1288）に火災に見舞われ版本が失われたが、泰定元年（1324）に寺が再興された際、寧波の刻工徐汝舟の版刻によって四刻本が作られた。

この語録は、北宋初期に成立した当初は七集八巻本のいわゆる「雪竇七集」だったが、南宋中期には語録、偈頌、詩歌という体裁によって三冊に分けられた。第一冊は「洞庭」、「開堂」、「後録」、第二冊は「拈古」、「頌古」⁶⁰、第三冊は「瀑泉」、「祖英」である。北宋の初刻本が每半葉十三行以上だったのを除けば、南宋の再刻本、五山の三刻本、元の四刻本は、いずれも每半葉十一行、每行二十字の由来を同じくする版本である。明初の建文帝のときにはじめて大藏經に収められ、その後すぐに「頌古」が省略されて六集になったが、明末の『嘉興藏』や近代の『大正藏』に至っては、構成の乱れや文字の転訛、脱落も生じており、もはや宋元の旧状を留めていない。

『雪竇録』の初刻本は早くに失われ、南宋の開禧版もわずかに「雪竇四集」という孤本が中国国家図書館に所蔵されているのみである。鎌倉時代の正応版は、日本に渡った開禧版を底本とする復刻本である。その唯一の完本は東洋文庫に所蔵されており、それによってすでに失われた宋僧徳雲の「序」を補うことができる。元の泰定版には完本が伝わっておらず、東京の石川武美記念図書館、ミュンヘンのバイエルン州立図書館、台北の「国家図書館」に零本が所蔵されているのみだが、それらによって失われた元僧如芝の「序」と「雪竇行状」を補うことができる。以上が現存する『雪竇録』の最も優れた善本であり、これらによってどうにかその宋元の旧状を回復することができる。

開禧本は南宋の「十刹」寧波資聖寺で刊行され、正応本はそれを受けて鎌倉時代の「五山」京都東福寺で上梓された。その間わずか八十年である。『雪竇録』が古代東アジアで刊行され伝播してゆく過程からは、五山制度が中国から日本へ伝承されていった歴史もかいま見られる。また、元の泰定本は中国には現存しておらず、日本に伝わったものによって、はじ

めてその真の姿を現わす。以上のことは、海外所蔵漢籍が東アジアの歴史を研究するうえで、いかに重要な価値をもっているかを示していよう。

【注】

- 1 関連する先行研究には、以下のようなものがある。永井政之「雪寶の語録の成立に関する一考察—雲門宗研究の為の文献整理」、『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』第6号、1972年、82-94頁。柳田聖山「雪寶頌古解説」、入谷義高・梶谷宗忍・柳田聖山『雪寶頌古』禅の語録15、筑摩書房、1981年、281-304頁。椎名宏雄「『明覚禅師語録』諸本の系統」、『駒沢大学仏教学部論集』第26号、1995年、201-234頁。黄繹勳「雪寶重顕禅師生平与雪寶七集之考弁」、『台大仏学研究』第14期、2007年、77-118頁。黄繹勳『雪寶七集之研究』法鼓文化、2015年。
- 2 高楠順次郎編『大正新修大藏經』卷四十七「諸宗部四」、東京大正新修大藏經刊行会、1991年、669-713頁。
- 3 胡文楷、民国二十三年「跋」、『雪寶四集』卷末、『四部叢刊続編』、商務印書館、1934年。たとえば、『雪寶塔銘』の作者呂夏卿の官職名は、「朝奉郎、尚書度支員外郎、直秘閣、兼充史館檢討官、同知太常礼院、兼□事騎都尉、賜緋魚袋」の41字から、大幅に縮められて20字になっている。
- 4 ここで注意したいのは、明代に刊行された最初の大藏經は、日中の学界で長らく知られていた『洪武南藏』ではなく、じつは『建文南藏』だということである。民国二十三年にその孤本が四川崇州上古寺で発見され、いま四川省図書館に所蔵されている。詳しくは、李富華・何梅『漢文仏教大藏經研究』第九章「明官版大藏經研究」第一節「初刻南藏」、宗教文化出版社、2003年、375-406頁を参照。
- 5 瞿鏞『鉄琴銅劍樓藏書目錄』卷二十、集部二、光緒四年常熟瞿鏞罍里家塾刊本、葉八〜九。中華再造善本工程編纂出版委員會『中華再造善本総目提要』唐宋編、集部、国家図書館出版社、2013年、599頁。
- 6 五山版『雪寶録』は二度版刻された。鎌倉時代の正応二年（1289）と南北朝時代（1336-1392）のものである。前者は、本稿で主に紹介する東洋文庫所蔵本のほか、石川武美記念図書館（旧成實堂文庫）、国立公文書館（旧内閣文庫）にも零本がある。後者は、石井積翠軒文庫、五島美術館（旧大東急記念文庫）に零本がある。

- 7 椎名宏雄「雪竇明覚大師語録解題」、柳田聖山・椎名宏雄編『禅学典籍叢刊』第二卷、臨川書店、京都、1999年、369-372頁。
- 8 「雪竇行状」、台北「国家図書館」藏元泰定本、葉四。なお、「雪竇行状」自体の文献学的問題については第四節の後半で取り上げる。
- 9 椎名宏雄氏の前掲論文によると、七集のうち成立が最も遅いのは「頌古」であり、北宋仁宗の宝元元年（1038）のことであるという。
- 10 藍吉富「刊本大藏經之入藏問題初探」、『中華仏学学報』第13期、2000年、167-178頁。
- 11 雪峰蘊閑「進大慧禪師語録奏札」、『大慧語録』卷一、『中華大藏經』第77冊、129頁。
- 12 雪峰蘊閑「謝降賜大慧禪師語録入藏奏札」、『大慧語録』卷一、『中華大藏經』第77冊、129頁。大慧宗杲の著作は、南宋になって大藏經に収められたが、やはり『崇寧藏』の「続刻」部分に属している。（『漢文仏教大藏經研究』、185-186頁。）
- 13 大智実統『仏果円悟禪師碧巖録種電鈔』第一卷第三則「馬大師不安」、江戸時代桜町天皇元文四年（1739）刊本、東京大学駒場図書館一高文庫所蔵、葉四十二。
- 14 『初刻南藏』第589号「軍」字函に『明覚語録』が収められている（椎名宏雄「洪武南藏の入藏禅籍」、『駒沢大学禅研究所年報』第17号、2006年、1-17頁）。
- 15 『祖庭事苑』およびその『雪竇録』との関係については、黄繹勲『宋代禅宗辞書『祖庭事苑』之研究』（高雄仏光文化事業有限公司、2011年）に詳細な研究がある。
- 16 川瀬一馬『五山版の研究』上巻、日本古書籍商協会、1970年、112頁、409頁。
- 17 『雪竇録』、日本東洋文庫所蔵の鎌倉時代の五山版。
- 18 『祖庭事苑』、日本国立国会図書館所蔵の南北朝時代の五山版。
- 19 一方、陸庵が大観版『雪竇録』を校訂する際の拠り所にしたのは、すでに散佚した北宋の「四明写本」である。『祖庭事苑』、日本国立国会図書館所蔵の南北朝時代の五山版、葉五十七。
- 20 『宋槧袁本昭徳先生郡斎読書志』志三下「釈書類」、『続古逸叢書』三十五、商務印書館、1928年、葉三十八。これは北平故宫博物院図書館所蔵南宋理宗淳祐九年（1249）本によって影印したものである。

- 21 『中華再造善本総目提要』はこの版本を「全帙」としているが、瞿鏞の誤りに引きずられたものである。しかも、版刻された年代も詳しく検討しておらず、「南宋中葉」とするのみである（598頁）。
- 22 張元濟『四部叢刊統編』集部、商務印書館、1934年。
- 23 その総題名は『慶元府雪竇明覺大師集』であり、『中華再造善本』唐宋編集部に収められている。北京図書館出版社、2003年影印。しかし、再造本は冒頭数頁に損佚および補抄の痕があり、しかも四集本来の装幀の順序を乱している。したがって、四集の最も優れた影印本は、やはり『四部叢刊統編』所収のものである。
- 24 椎名宏雄「『明覺禪師語録』諸本の系統」、206頁。ただ、氏は四集がいわゆる「宝慶本」とであると誤解している。詳細は脚注32を参照。
- 25 「普門院経論章疏語録儒書等目録」「収」字部第4種、高楠順次郎編『昭和法宝総目録』第71種、東京大正新修大蔵経刊行会、1991年、969頁。
- 26 許紅霞「『普門院経論章疏語録儒書等目録』中所載書籍伝入日本の時間之弁疑」、『普門学报』第33期、2006年。
- 27 柳田聖山・椎名宏雄編『禅学典籍叢刊』第二卷、74頁。
- 28 明僧円極居頂（?-1404）『続伝灯録』卷二十八によると、徳雲は自得慧暉（1097-1183）から法灯を嗣いだという。また、清僧行正（生没年未詳）『雪竇寺志』卷四は、徳雲の法系を曹洞宗十二世とする。
- 29 柳田氏は、「冲、本、秀、夫」を「冲本、秀夫」と読んで断句を誤っている。（柳田聖山「雪竇頌古解説」、『雪竇頌古』禅の語録15、281-304頁。）じつは、「冲」は若冲覚海、「本」は円照宗本、「秀」は円通法秀、「夫」は広照応夫を指し、四人は雪竇の再伝の弟子である。また、椎名氏は、「視」を「祖」と勘違いしたために、その前後の文脈を取り損なっている。（椎名宏雄「『明覺禪師語録』諸本の系統」、211頁。「雪竇明覺大師語録解題」、371頁。）
- 30 中国の五山十刹制度がどのように確立されたかは、史料を見ても、現在の研究を見ても、日本のもののほどはしっかりしていない。張十慶『五山十刹図与南宋江南禅寺』、東南大学出版社、2000年、18-19頁。
- 31 川瀬一馬『五山版の研究』第二章「五山版の発生期」、72-73頁。住吉朋彦「日本漢学史における五山版」、『中国—社会と文化』第24期、2009年、224-249頁。
- 32 椎名宏雄氏は、『雪竇録』は南宋の宝慶元年（1225）にも刊行されたことが

あり、それが中国国家図書館所蔵の「雪竇四集」であると考えているが（『明覚禪師語録』諸本の系統」、206 頁）、それは四集を「『雪竇録』から宗教性を取り除いた独立の文学選集である」と誤解したために生じた間違いである。実際には、「雪竇七集」の子集は、「祖英」と「頌古」以外に単行したことがない。また、『雪竇録』五山版には、正応本以降の南北朝時代（1336-1392）の版本もあるが、それは正応版を底本にした復刻本である。五島美術館の「瀑泉」（『大東急記念文庫書目』、東京大東急記念文庫、1955 年、504 頁）と、石井積翠軒文庫の「祖英」（『石井積翠軒文庫善本書目』本文篇、臨川書店、京都、1981 年、75 頁）がその版本であり、禅寺において『雪竇録』の需要があったことを示している。正応本とは版式が少し異なっているが、本稿では取り上げない。

- 33 以上は、川瀬一馬『新修成實堂文庫善本書目』第四編「唐本（中国本）」第二章「元刊本」『雪竇和尚語録』条（お茶の水図書館、1992 年、988 頁）から引用した。
- 34 椎名宏雄「『明覚禪師語録』諸本の系統」（214 頁）から引用した。
- 35 http://ostasien.digitale-sammlungen.de/cn/fs1/object/display/bsb00077340_00001.html?sort=sort-Title+asc%2CsortVolume+asc&letter=1&pubYear=%7b1324%7D&mode=pubYear
- 36 台北「国家図書館」所蔵の泰定本は、葉一は楷書による補写であり、葉三は脱落している。また、その付録である「行状」の末尾の勸縁記は、「雪竇住山守常勸縁」という一行を欠いている。
- 37 これについては、阿部隆一『中国訪書志』（汲古書院、1975 年、188 頁）による。
- 38 伊藤みのり「山本二峰（悌二郎）と澄懷堂コレクション」、『美術フォーラム 21』第 26 巻、2012 年、48-53 頁。
- 39 『適園藏書志』卷十二集部三別集類三、民国五年（1916）南林張鈞衡家塾刻本、葉二十五。
- 40 『苙圃善本書目』卷一宋刊本子部、『書目叢編』三編、台北廣文書局有限公司、1969 年、10 頁。
- 41 劉哲民・陳政文編『搶救祖国文献の珍貴記録：鄭振鋒先生書信集』、学林出版社、1992 年、225-226、264、267、283 頁。黃庭需『張乃熊藏書研究』、台湾大学 2009 年度修士論文。顧力仁・阮靜玲「国家図書館古籍搜購与鄭振鋒」、『国家図書館館刊』2010 年第 2 期、129-165 頁。

- 42 国立中央図書館編『国立中央図書館善本書目』（中）甲編卷四集部別集類、台北中華叢書委員會、1958年、40頁。『国立中央図書館善本書目初稿』卷四集部別集類、『屈万里先生全集』第16冊、台北聯經出版、1985年、205頁。国家図書館特蔵組編『国家図書館善本書志初稿』集部「慶元府雪竇明覺大師祖英集」条、台北国家図書館、1999年、201頁。
- 43 阿部隆一『中国訪書志』、188頁。
- 44 http://192.83.186.63/F?func=find-b&request=000519150&find_code=SYS
- 45 沈津「鄭振鋒致蔣復璁信札（下）」、『文献』2002年第1期、217頁。
- 46 じつは台北「国家図書館」には、元惠宗の至正二年（1342）に刊行された『雪竇録』『頌古集』の残本があり、その文字の形は当時全国的に流行していた趙体の行楷書である。ただ、当時はすでに元末だった。なお、この版本も中国の学界ではまだ知られていないものである。
- 47 脚注29では、椎名氏が「視」を「祖」と勘違いしていることを指摘したが、それはこの版本によって対校した結果である。
- 48 李修生主編『全元文』、江蘇古籍出版社、1997年。
- 49 楊維禎「大中祥符禪寺重興碑」、『東維子文集』卷二十三、『四部叢刊』影旧抄本、葉十。
- 50 明僧大壑『南屏淨慈寺志』卷四「法胤」、明万曆刊清康熙增修本、葉四十一。
- 51 観縁記のなかの「雪竇住山守常観縁」という八字は、台北「国家図書館」所蔵本にはない。ミュンヘンのバイエルン州立図書館所蔵の元版、東洋文庫所蔵の五山板の補抄部分によって補った。なお、この「守常」がどういう人物であるかは、さらに調べてみる必要がある。
- 52 「雪竇行状」、台北「国家図書館」所蔵元刊復宋本、葉六。
- 53 南石文琇『増集続伝灯録』卷四、藍吉富主編『禪宗全書』史伝部第16、北京図書館出版社、2004年。
- 54 釈履平編『雪竇寺志略』、『中国仏寺志叢刊』第88冊、81頁。
- 55 木宮泰彦「元朝の彫工と出版事業」、『日中文化交流史』第4篇「南宋、元」第5章「入元僧と文化的移植」、商務印書館、1980年、479頁。
- 56 川瀬一馬『古活字版之研究』上巻、日本古書籍商協会、1967年、51頁。
- 57 長沢規矩也「元刊本刻工名表初稿」、長沢先生喜寿記念会編『長沢規矩也著作集』第三巻「宋元版の研究」、汲古書院、1983年、210頁。
- 58 阮元編『兩浙金石志』卷十五、清道光四年（1824）刊本、葉四十四。

- 59 脱脱等撰『金史』卷一百十一「列伝」四十九、中国国家図書館所蔵元刊本、葉一。
- 60 第二冊のうち、「拈古」と「頌古」のどちらが前に置かれていたかは、なお議論の余地があるようだが、本稿では立ち入らないことにする。

【補訂】

補訂 1

2017年12月19日、東洋大学東洋学研究所の会議、「東アジアにおける禪思想の諸相」に参加した際に、筆者は東京の石川武美記念図書館を再び訪れ、研究員の佐藤先生のご案内で、館蔵の元泰定本を手にとって以前にも増して仔細に閲覧しました。

この本には外箱があり、「雪竇」「石林」と墨書されています。乾・坤の二冊本で、乾冊には『開堂』（版心は「語録」「雪」）、『後録』（版心は「語録後」「雪二」）を収め、坤冊には『拈古』（版心は「拈古」）、『頌古』（版心は「頌古」）を収めています。乾冊の表紙には「雪竇録」という題簽がありますが、たぶん室町時代の日本人僧侶の筆でしょう。この書を東アジアで最初にこの三字で呼んだのは、あるいはここに始まるのでしょうか。表紙には「蘇峰」という六角形の朱印があります。『開堂録』の巻首の題は「杭州承天寺住持□□嗣法弟子傳宗校勘立板」というもので（第一葉b）、巻尾には「續添雪竇語録並歌頌一集」とあります（第二十葉a）。

坤冊には一紙が差し込まれており、そこに徳富蘇峰が「是書實是元泰定元年、我正中元年刊也。藏書印：一曰善慧軒，是京都東福寺塔頭也；一曰彥梁，未詳為何人；一曰彥洞，彥洞字明叟，蘭州芳禪師之嗣法，京都建仁寺僧也，晚年不知其終處；一曰掖齋，即狩谷望之也。卷末『天文十一壬寅暮春，於善慧室內披覽之次，信筆朱句矣，瓢園山人五十三齡』之文字，要是高僧之手澤，名剎之遺寶也。予偶然接觸此冊子，欣快不能自禁，傾囊以高値購之。蓋雪竇《頌古》，是禪宗之津筏，《碧巖》一書卻不免為蛇足也。明治三十四年七月念九，蘇峰手識。」という跋文を記しています。跋文の

末尾には「蘇峰用箋」という長方形の朱印が押されています。

補訂2

2017年12月、筆者は幸いにも仙台の東北大学の齋藤智寛先生と手紙を交え、版本および古印学についての詳細なご教示を頂き、それによってドイツのミュンヘン所蔵の元泰定本『祖英集』の來歴を正確に理解できるようになりました。謹んで感謝を申し上げます。

この本の版心には「英上」「英下」とあり、江戸時代初期には、臨済宗の僧、一絲文守の旧蔵でした。大正・昭和時代には、銀行家の石井光雄（1881-1966）の積翠軒文庫の所蔵となりました¹。その後、小汀利得の所有に帰し、小汀文庫に入りました。小汀没後、旧蔵本は離散し、本書は書肆で版本学者でもあった反町茂雄（1901-1991）が入手し、弘文荘の蔵書となりました²。長方形の朱印「明月荘」は反町氏の蔵書印です³。その後、あるいは反町の『弘文荘待賈古書目』を見たのか、ドイツ人の蔵書家が購入し、この本はバイエルン国家図書館の蔵書となって今に至っており、普通の読者である私たちでも実物を見ることができるようになったのです⁴。

- 1 川瀬一馬編『石井積翠軒文庫善本書目 本文篇』（臨川書店（京都）、1981年）216頁。
- 2 反町茂雄編『弘文荘待賈古書目』第45号に著録されている第296番が『明覺大師祖英集』（元版、一絲和尚手澤、石井積翠軒旧蔵）である。反町茂雄編『弘文荘古版本目録』（弘文荘（東京）、1974年）257頁、262頁を参照。
- 3 渡邊守邦・後藤憲二編『新編藏書印譜』（青裳堂書店（東京）、2001年）261頁。
- 4 この曲折に富む経緯は、椎名宏雄先生が90年代に『宋元版禅籍の研究』を書いた時点ではもう分からなくなっていたので、積翠軒文庫旧蔵の『祖英集』は「現蔵者は不詳」とされている。椎名氏の『宋元版禅籍の研究』（大東出版社（東京）、1993年）573頁を参照。

（補訂翻訳：伊吹敦）